静岡大学
Shizuoka University

人をつなぎ
未来社会を構想するための
学びがここに

グローバル共創科学部
Faculty of Global Interdisciplinary Science and Innovation

グローバル共創科学部

グローバル共創科学科

2025

Point 学びのポイント

1

地域国際連携、
ゼロカーボン社会、
人間科学を中心とし、
幅広いリベラルアーツを
身に付ける

2

国際的かつ
デジタル社会における
コミュニケーション力を
身に付ける

3

多様性を尊重し、
他者との協働による課題解決力を
身に付ける

グローバル共創科学部の
ウェブサイトはこちら

最新の情報については、本学部ウェブサイトにて公表します。https://www.gkk.shizuoka.ac.jp/

本学部の目指すところ

現代社会では、地球規模の課題から地域社会の課題に至るまで、社会的課題が複雑化、そして多様化しています。これに対応するため、多様な人々と協働し、広い視野を持った「共創型人材」を育成することは大変重要です。また、本学部の前身である地域創造学環では、「地域サステナビリティ（地域経営分野、地域共生分野、地域環境・防災分野）」「アート＆マネジメント」「スポーツプロモーション」といった教育プログラムを通じて、他者との共生、サステナブルな社会、真の豊かさというテーマに取り組んできました。

本学部は、これらのテーマを次に示す「未来の課題群」として継承し、これらを実現するための教育・研究を推進します。

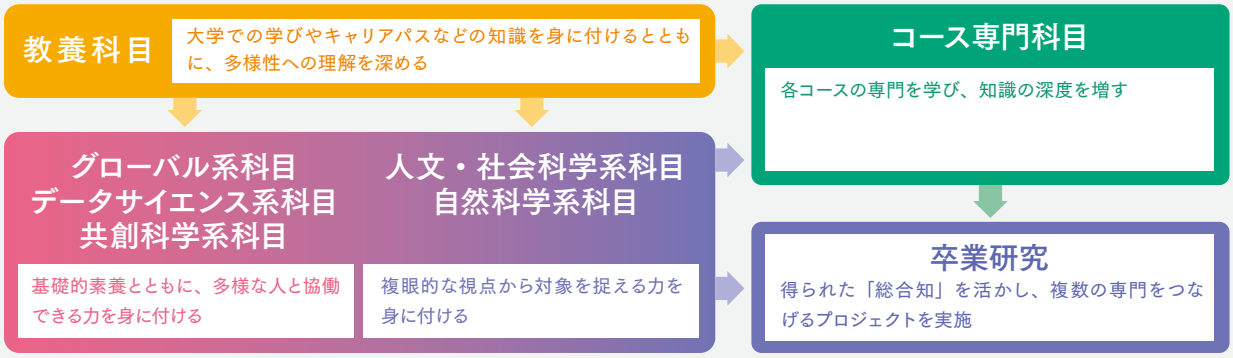
グローバル共創科学部が着目する未来の課題群

- **現代に生きる人々が、より創造的かつ友好的に暮らすための課題**
- **新たな価値を創生し、持続可能な循環型社会を実現するための課題**
- **人間とはどうあるべきかを問い続け、真の豊かさを主体的に実現するための課題**

特色あるカリキュラム

学部共通科目として、１年次から基礎科目**（グローバル系科目、データサイエンス系科目、共創科学系科目）**を配置し、基礎的素養と共に多様な人と協働できる力を身に付けます。また、**人文・社会科学系科目、自然科学系科目**で複眼的な視点から対象を捉える力を身に付けます。その上で、３年次よりそれぞれの学生が専門分野（コース）を選択し、**コース専門科目**や**卒業研究**によって、各コースの専門を学び、知識の深度を増し、「総合知」を生かして複数の専門をつなげるプロジェクトを実施します。

学部共通科目として１年次に共創の概念を学び、それに続く共創に必要な要素を身に付ける科目を履修した上で、
３年次より学生個々人が専門分野を選択し、高度な知識・技術や考え方を身に付ける。



		単位数		１年次		２年次		３年次		４年次	
		必修	選択	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期
教養科目		9	11								
学部共通科目	グローバル系科目	10	6								
	データサイエンス系科目	10	2								
	共創科学系科目	10									
	人文・社会科学系科目	6	8								
	自然科学系科目	4	8								
	卒業研究	6									
コース専門科目	コース専門科目		26								
	上記の科目群から履修する科目		8								

グローバル系科目： Oral Communication、English Presentation、ファシリテーション概論、海外研修プログラム（全学生に履修を推奨）、コラボラティブ・ワークス（フィールドワーク）　など

データサイエンス系科目： データサイエンス演習、AI基礎、共創科学調査法　など

共創科学系科目： 国際地域社会とダイバーシティ、バイオエコノミー概論、総合人間科学概論、コミュニティ基礎論　など

人文・社会科学系科目： 人間の尊厳と人権、現代社会の認知科学、アート・デザインコミュニケーション　など

自然科学系科目： スポーツ・健康科学、暮らしの科学、防災・減災論、カーボンニュートラル科学　など

各コースにおける専門教育

グローバル共創科学部は、学問領域の分野の垣根を越えた多様な知の交流を促すことを重視しており、学問分野・専門分野の垣根を取り払った、１学科３コース制をとっています。コースとしては、先に示した未来の課題群に対応するように、「国際地域共生学コース」、「生命圏循環共生学コース」、「総合人間科学コース」を設定しています。これらの３つのコースは独立しているのではなく、３コースが相互に協働することにより、「総合知」による未来の課題の解決を目指します。

国際地域共生学コース

コースが目指すもの

- 国際化する地域社会に適した人権、法、社会保障の探求・構築
- 多様な人々が暮らす地域社会での包摂的な生活環境や災害への対応の検討
- 芸術・文化を通じた人と社会の創造的な協働の場の創出

カリキュラムの特徴

- 社会学・文化人類学・法学・芸術文化・建築学などを基礎に幅広く学ぶ
- 国際社会と地域社会を通底する社会課題を考察し、解決を構想する思考力を養う
- 言語にとどまらない幅広いコミュニケーション・スキルを修得する

卒業後の進路の例

- 異なる文化背景を持つ海外の企業や政府などと協働して事業を実施できる企画・営業職
- 共生社会の拠点形成を担う福祉・教育団体の総合職
- 地域の魅力の創出・発信に専門性を発揮する行政職員

生命圏循環共生学コース

コースが目指すもの

- 再生可能エネルギー、持続的な食料や材料生産などの技術開発と社会実装
- 気候変動により激甚化する災害への対応
- 社会の新しい価値と仕組みの創生

カリキュラムの特徴

- エネルギー、食料、生物材料、社会インフラ、生態系等の循環・再生についての最先端の技術と人間社会の仕組みを理解する
- 物理学・化学・生物学・法学・経済学・社会学を中心とした基礎を幅広く学ぶ
- 地球（生命圏）と人間社会が共生するための課題設定＆課題解決能力を養う

卒業後の進路の例

- グリーンエコノミーに精通する企業の国際戦略を担うマネージャーや官庁職員
- 防災対策を専門とする環境・建設コンサルタントや自治体職員
- 企業等工場の生産工程における品質管理、環境マネジメントを行う職員

総合人間科学コース

コースが目指すもの

- 人間の総合的理解を通じた、新たなウェルビーイングの探求
- 人・自然をめぐる地域課題の解決を通じた共生社会の実現
- 先端科学技術の発展と調和した人間社会の検討

カリキュラムの特徴

- スポーツ科学・心理学・法学・倫理学など、ウェル・ビーイングに関わる多様な学問を専門的・包括的に学ぶ
- 人・自然との共生をマネジメントできる実践力を育成する
- Society5.0を見据えた情報科学教育

卒業後の進路の例

- プロスポーツ団体（スポーツ協会）の職員、地方自治体のスポーツ振興を所管する部署の職員
- 地方公共団体におけるデジタル振興や地域振興を所管する部署の職員
- IT企業で人間中心のサービス・製品の開発に関わる企画職

コラボラティブ・ワークス

「他者と協働し、知をつなぐ方法を実践的に身につける」

グローバル共創科学部では多様な人々と協働した取り組みのもと、人文・社会科学から自然科学に至る広範な知をつなぐことで未来社会を構想・デザインできる「共創型人材」の育成を目指しています。「コラボラティブ・ワークス」は、学生が社会的課題の生成する現場において、多様な専門性やステークホルダーとの共創を通じて、社会的課題に取り組む上で必要とされる①参与、②発見、③探求、④解決のプロセスを学び、持続可能な未来づくりの担い手（共創型人材）となるための力を養うことを目的としています。

現実の社会的課題に対して、専門的知識をもつ者と学生と社会のステークホルダーが解決に向けてトランスディシプナリーに協働する経験（「コラボラティブ・ワーク」の経験）を積むことにより、①専門知、経験知、生活知などさまざまな知が融合し、学生、社会のステークホルダー、研究者それぞれがクリエイティブな発想でともに課題に取り組むことができるようになること、②専門知とフィールドの往復を通じて得た知見および課題解決方法や、新たな社会の構想を、社会的課題やステークホルダー、フィールドに成果として還元すること、③学生が持続可能な未来社会づくりの担い手となってゆくことを目指しています。

コラボラティブ・ワークスの特徴

1．体験的、段階的に社会的課題への取り組み方を学ぶ
2．学問領域間の共創、学外や学部外との共創を意識して取り組む
3．クリエイティブな発想で共創による教育研究を試行し、成果をステークホルダーに還元する

コラボラティブ・ワークスで学べるワークの例

- デジタル社会の高齢者の居場所づくり
- 誰一人取り残さない地域の医療・ケアを考える
- まちづくりと融合した地域福祉を考える
- 中山間地域が存続するには？　～農業と生活環境～
- 地域の自然と社会を総合的にとらえるサステナビリティーアクション
- 静岡市清水区小島地区における防犯教育の実践
- 地域の共有資源としての森林の保全と持続可能な利用
- 自然科学の研究／仕事の魅力を学ぶ
- ごみから考える生活・社会・世界
- 共創科学的スポーツへのいざない

https://www.gkk.shizuoka.ac.jp/education/fieldwork/

海外研修プログラムⅠ

「海外での経験と学びから人間理解を深めるスキルを得る」

現地海外研修またはオンライン海外研修に参加し英語に限らず研修先で使われている言語によるコミュニケーション力の向上、異文化理解、国際感覚を身につけます。現地の大学や語学学校等で語学研修を受け、語学力やコミュニケーション能力の向上を養うとともに、現地で開催される様々なアクティビティーに参加したり、現地の学生や地元の人達との交流を深め、本学部が学生に求める「人間とはどうあるべきか」に立ち戻り、人間そのものに対する理解を深めるスキルを得ます。研修終了後はその成果を学内で発表します。

主な現地海外研修先

- アルバータ大学（カナダ）
- キャンパスフランス（フランス）
- チチェスターカレッジ（イギリス）
- ウーロンゴン大学（オーストラリア）
- マラヤ大学（マレーシア）

主なオンライン海外研修先

- 慶北大学（韓国）、GITC（フィリピン）

https://www.gkk.shizuoka.ac.jp/education/study-abroad/

データサイエンス演習

「データから価値を生み出す技術を学ぶ」

これからの社会において、データはあらゆる分野で生み出されるようになります。しかし、データはただ持っているだけでは役に立ちませんし、誤った使い方をすると期待されるような成果が得られません。本講義ではコンピュータを用いた演習形式でデータの分析を実践することにより、その手法を習得します。そして、分析結果を現状の正確な把握や重要事項の決定などに役立てるための基礎技術を学びます。

本学部では、「データサイエンス演習」以外に、データサイエンスに関わる「数理・データサイエンス入門」、「基礎数学」、「データサイエンス基礎」、「データエンジニアリング基礎」、「AI基礎」、「プログラミング演習I」を学生全員が履修する科目としています。これらの科目について、「グローバル共創科学部数理データサイエンスAI教育プログラム」として、文部科学省数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度の「応用基礎レベル」へ申請中です。

https://www.gkk.shizuoka.ac.jp/dsaiprogram/

専任教員紹介

国際地域共生学コース

池田　恵子

●災害に強い社会、ジェンダー・多様性の視点による防災

日本と、バングラデシュを中心とした南アジアの国々を対象に、頻発する自然災害への対応・適応の観点から暮らしや社会組織・規範のあり方を研究しています。社会や集団の災害への強さや弱さは、地域開発や社会政策の展開によってどう変化するのか。また、住民参加型の地域防災事業の有効性やジェンダー・多様性の視点を重視した防災・災害対応・復興などについてもフィールドワークを通して明らかにしています。

主な授業科目：防災まちづくり、グローバル協力論

石川　宏之

●地方都市中心市街の活性化、災害遺構などを活かしたジオパーク活動

- 中心市街地における低未利用地の再編・マネジメント手法、都市機能を誘導する地区のあり方、地域遺産を活用した都市再生手法など、計画技術に関することを研究しています。
- 巨大災害で疲弊した地域経済を回復するには、内発的な経済復興と併せて人的復興が必要です。復興まちづくりで減災教育や地域振興に災害遺構などを活かすために地域住民が災害遺構の価値を見出すプロセスや公学民連携のあり方について研究しています。

主な授業科目：都市計画論、住居計画

太田　美帆

●雇用、社会サービス、地域活性化、社会政策

スウェーデンは「豊かな福祉国家」と呼ばれていますが、それは主に第二次世界大戦後に行われた社会政策により実現しました。しかしグローバル化の進展により、1980年代以降は従来の社会政策がうまく機能せず、地域格差や経済格差が社会問題化しました。研究では、主に社会サービスや雇用に着目しながら、(1)過疎地域に住む人々が地域に住み続けるために行っている取り組み、(2)それらの取り組みに対するEU政策の影響、(3)近年の移民・難民の増大により生じた社会問題とその解決策について考えています。

主な授業科目：コミュニティ基礎論、コラボラティブ・ワークス

川崎　和也

●先住民/少数民族、文化の資源化、地域社会、国民国家、グローバリゼーション

オーストラリアの先住民であるアボリジニの社会文化の動態に関する文化人類学的な研究を行っています。これまで家族や親族関係を中心とするアボリジニの社会構造とその変化に関する研究のほか、狩猟採集や経済活動、美術工芸品などについて、フィールドワークにもとづく調査研究を行ってきました。現在は、アボリジニの伝統文化の観光資源化が彼らの社会文化や生活に与える影響について調査研究しながら、地域と国家、グローバル社会の関係について考えています。

主な授業科目：共創科学調査法、エスニシティ論 ほか

Darius C. Greenidge

●地球学、鉱物学、環境保全、芸術、歴史、文学、科学と技術

専門の研究は地質学です。主に、ケイ素鉱物（元素レベルのシリカと酸素が基礎構造：SiO2）の中に欠陥や鉄やクロームなどの不純物があり、それによる色の変化の研究をしています。何万年も地中で眠っている鉱物は、熱と近辺の放射性物質にも影響され（ウランなど）、構造内の電子はそういったエネルギーによって、通常の位置から吹き飛ばされ、それによって光の吸収率が変化します。他に英語での授業：古代から現代にかける科学と技術、未来に向ける地球の自然とバランス、日本と他国の比較文化、日本語で平和学もやっています！

主な授業科目：Reading and Discussion、国際地域ケーススタディ

朱　　曄

●比較民法、個人データ利活用の法的仕組み

研究生活をスタートして以来、民法を中心に比較研究を行っております。
近時、デジタル社会を迎えたことを踏まえて、AIと法やパーソナルデータの利活用について研究活動を展開しており、最新のデジタル技術を活かして介護支援事業を行う企業との共同研究をスタートし、社会実践的な研究を模索しています。

主な授業科目：比較文化からみる法

©Osamu WATANABE

立花由美子

●現代美術、ミュージアムの公共性、市民参画

日本の美術館が向き合っている日本の美術館固有の「市民」像に研究の関心を置いています。「〇〇の国のお国柄」といわれるように、各国の市民像はそれぞれ異なっており、これに伴い各国の博物館学もそれぞれの市民像から議論を始めるべきと考えるからです。美術館の向き合うべき市民は、なにも美術館に来てくれる人ばかりではなく、まだ美術館に行ったことがない人も含まれています。諸外国の模倣で理想論を語るのではなく、そうした広い市民の生の声から、日本の美術館像について考えていきます。

主な授業科目：アートシンキング・デザインシンキング、ミュージアムスタディーズ、視覚芸術論

チョチョル 明子

●英語教育、ミクロネシア連邦における英語教育・日本語教育

私はミクロネシア連邦における言語教育を研究しています。ミクロネシア連邦のヤップ島とポンペイ島で日本語の授業を担当しながら、現地語教育に対する英語教育の役割について考えさせられました。現地語や現地の文化を尊重した英語教育とは？ 現地人英語教師の思いとその実践方法は？ 現地のニーズや学習者の背景文化にふさわしい教材や教授法について、現地の人々の声や実践から明らかにしていきます。

主な授業科目：英語コミュニケーション、総合英語、海外研修プログラム

Michael K. Peters

●文化人類学

私は、文化人類学の視点から、男女のケニア人ランナーを対象に研究を行っています。ケニア人ランナーの来日目的は、ケニアにおける自分や家族の社会的地位・経済的状況をよりよいものとすることにあります。日本にいる間、選手たちは、ケニアにいる家族に仕送りをしながら、帰国後のケニアでの生活のために貯蓄をするという困難な課題に直面しています。私の研究目的は、両国における選手たちの体験を分析することにより、選手たちのプライドや恥の決定要因、希望の脆さ、そして、自らの富を用いて地元で尊敬されるための方法を明らかにすることです。

主な授業科目：Oral Communication I

山本好比古

●社会言語学、応用言語学（英語教授法）

私の研究分野は２つあり、一つは談話分析を用いた男女の会話の分析（社会言語学）です。会話におけるジェンダーステレオタイプに疑問を持ちつつ、日常会話における男女の会話を実際に録音し、どのような特徴があるかを分析します。もう一つは応用言語学（英語教授法）の研究をしています。例えば、英語学習者が英語母語話者以外と英語で会話する時の様々な問題点などを探り、どうしたらうまく会話が成立するのかを探ります。

主な授業科目：海外研修プログラム Ⅰ・Ⅱ

ﾚｯﾄﾞﾌｫｰﾄﾞ･ｽﾃｨｰｳﾞ

●アメリカ文学、小説の書き方

文学を読むことは、様々なメリットがあります。文学を読む人の中には、言葉に敏感になって、コミュニケーション力が高くなる人が多いです。また、様々な人物に「会える」ため、共感力に優れる人が多いです。どんな人生を選んでも共感力は大事ですよね。

文化理解の立場から考えると、人間行動は三つのタイプがあります。個人的行動、文化的行動、普遍的行動。小説を読むと、この三つははっきり見えます。ですので、自分以外の人のことを理解するために、小説をたくさん読むことを推薦したいと思います。

主な授業科目：Oral Communication、Reading & Discussion、English Writing

生命圏循環共生学コース

青木　憲治

●セルロース、複合材料、脱プラスチック

脱炭素社会の実現には、エネルギー、材料、システム等様々な分野でイノベーティブな技術開発が必須です。当研究室ではセルロースとプラスチックとを混ぜ合わせた「セルロース系複合材料」の開発を行っています。草木の主成分であるセルロースを自動車や家電製品の材料として使えるようになれば、プラスチックの削減につながります。しかし、乗り越えなければならない技術課題が多いのも事実です。私のミッションは環境に配慮した材料開発ですが、未来を創る研究開発だと思っております。

主な授業科目：資源循環化学、材料科学

写真
セルロース/ポリプロピレン複合材料の電子顕微鏡写真
（612nm × 696nm × 85nm）
（着色がセルロース）

板倉美奈子

●環境・人権と経済の両立、カーボンニュートラル社会構築のための法

SDGsが掲げる「誰ひとり取り残さない」サステナブルな社会、そして脱炭素社会の構築のためにはグローバルレベルでの経済・社会の根本的な変革を必要とします。国際法は、国際社会における国同士の付き合いを円滑にするために作られた国際社会共通のルールです。私はその中でも国家間の経済関係を規律・調整する国際経済法を研究対象としており、環境・人権と経済の両立－具体的には、二酸化炭素吸収源である森林などの環境資源の保全と持続可能な利用をどのようにして両立させるかについて研究をしています。

主な授業科目：地球環境問題と法、農村・森林の環境と法

小野　晶子

●キノコ、分子生物学、バイオリファイナリー

キノコは、名前が付けられているものは世界で約１万４千種ほどありますが、これは地球上に存在するキノコの約１割にも満たないといわれているほど奥の深い生物です。キノコという研究資源の宝庫から、ユニークな特徴を探索し、地球の環境問題を解決できないか研究を進めています。まだまだ情報の少ないキノコに対して、次世代シーケンシング技術を駆使して網羅的な遺伝子解析を行うことで遺伝情報を収集・整理し、遺伝子組換えやゲノム編集ツールを用いて、能力を高めたキノコを作出することなどを行っています。

主な授業科目：バイオテクノロジー、環境微生物学

金キョンミン

●水域でのカーボンニュートラル、水環境の再生、再生可能エネルギー

近年の急速な都市化・工業化により、川や海などの水域で資源・エネルギーの枯渇などの社会問題が顕在化しています。私はこれらの問題解決に貢献するため、以下のテーマで研究を行っています。① 汚泥からの電気エネルギー生産（微生物燃料電池）、② 産業副産物（石炭灰・製鋼スラグ）を水質浄化材料として活用する資源循環研究、③ 水生植物の光合成によるカーボンニュートラル機能の解明。人間社会と自然の共生は緊急課題であり、これらの研究テーマは、人間活動による汚染物や廃棄物を有益な資源として自然に還元することを目指しています。

主な授業科目：基礎物理学、環境工学

小池　亨

●動物の器官の発生と再生

動物の「発生」と「再生」は、古くから多くの人を魅了し続けている生命現象です。私の研究室では、動物の体を構成する器官の「発生と再生の仕組み」に興味を持って研究しています。主な研究対象は、脊椎動物のラットやマウスの肝臓、および無脊椎動物である棘皮動物に属するナマコの消化管です。これらの発生や再生に関わる様々な生命現象、特に組織構築における細胞の増殖や分化、細胞同士のコミュニケーションなどに関わる分子機構の解明を試みています。再生医療にも繋がるような基礎研究を目指しています。

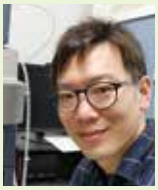
主な授業科目：基礎生物学、生物多様性保全論

斉藤　俊貴

●天文学、宇宙物理学、データ駆動天文学

私たちが住む地球は太陽系にあり、その太陽系は天の川銀河の中に存在しています。私は、銀河はいつどのように誕生し、138億年かけてどうやって今現在の多様な色や形などの個性を獲得してきたのかに興味を持ち、「銀河形成・進化」「銀河とブラックホールの共進化」などをテーマに研究を進めています。この宇宙には数千億もの銀河が存在し、１つの銀河の中には数千億もの星が存在するといわれています。天文学は、この膨大な数の天体を観測しデータを精査することでデータの背後に存在する物理法則に迫る学問です。近年は、観測技術の発展によりデータ量も膨大になりつつあるため、機械学習などのデータ駆動科学にも興味を持ち、データサイエンスの天文学への応用にも取り組んでいます。

主な授業科目：基礎数学、統計数学入門、AI基礎



崔　宰熏

●生命現象、神秘のキノコ、生物間コミュニケーション、天然物化学的手法

「フェアリーリング」という、芝生にキノコ（子実体）がリング状に発生し、芝草がリング状に濃緑色を呈して繁茂した後に枯死する現象があります。その生命現象（キノコが作る）を天然物化学的・生化学的に解明し、原因物質であるフェアリー化合物（fairy chemicals）を発見しました。現在、フェアリー化合物が新たな植物ホルモンである可能性を証明する研究を行っています。

主な授業科目：基礎化学、分析化学

キノコが作るフェアリーリング→

富田　涼都

●環境のローカルガバナンス、自然共生社会

「環境問題」は、必ず環境と社会の相互作用のなかで発生します。その解決のためには環境と社会の関係を分析しなければできません。それを人や社会の側から明らかにするのが環境社会学です。私はなかでも「よりよい自然と人間のかかわりを現場の社会から考える」ことを研究テーマとしています。「人と自然のかかわり」があるところすべてが研究対象になるので、農林漁業はもちろん、自然再生と地域社会の関係、天然資源管理、市民参加型調査、在来作物の保全、動物園など守備範囲は広いです。

主な授業科目：環境共生社会論

平井　浩文

●キノコ、カーボンニュートラル、環境浄化

自然界にて木材は、白色腐朽菌と呼ばれる一群のキノコ（微生物）で腐朽・分解されており、身近な例として、シイタケ、ヒラタケ、エリンギが挙げられます。地球温暖化や環境汚染といった現代の地球環境問題を解決すべく、この白色腐朽菌を用いて、(1)カーボンニュートラルな素材である木材等の非可食性バイオマスよりバイオ燃料やプラスチック原料を製造する技術の開発、(2)様々な環境汚染物質の分解・無毒化技術の開発、を行っています。

主な授業科目：環境再生科学

堀池　徳祐

●ゲノム情報解析、進化

近年、DNAの塩基配列決定技術の進歩とともに、様々な生物のゲノム配列情報が利用できるようになってきました。当研究室では、大量遺伝子情報を活用し、進化に関する研究をしています。例えば、網羅的な収斂タンパク質検出プログラムを開発し、タンパク質の収斂が進化に及ぼす影響を明らかにしたり、これまでよりも精度の高い系統解析を可能にするための基盤技術を開発したりしています。

主な授業科目：遺伝と進化

水谷　洋一

●地球温暖化対策、カーボンニュートラル政策、地域環境政策

市場経済では自らの経済活動の「費用」は自ら負担しなければならないことが大前提です。しかし、それが、第三者ないしは社会全体に押しつけられている状況が少なからずあります。これを社会的費用といい、その典型的な例が環境問題です。これまで日本を含め多くの国々では、社会的費用を減らすために様々なルールづくりをしてきており、産業公害（工場公害）については、一定の成果をおさめてきました。現在私は、地球温暖化（気候変動）を軸に、その社会的費用を削減するためにどのような社会的ルールをつくったらよいかを研究しています。

主な授業科目：環境と経済

村上　博紀

●植物・藻類、バイオ資源

植物や藻類は、光合成により大気中のCO_2から様々な有機化合物を生成することができます。光合成生物が作り出した有機化合物を化石資源の代替として活用することで、環境負荷の少ない社会を作ることができると考えられます。

本研究室では、植物や藻類を研究対象として、生体内における代謝システムの解明を目指しています。特に、生理活性作用の高いオメガ３脂肪酸や、バイオ燃料として利用可能な油脂といった産業的利用価値の高い脂質種の代謝系に着目しています。これらの代謝システムに関する知見を基盤にして、代謝工学的なアプローチにより物質生産能を改変したスマートセルを創出し、脱炭素社会の構築に資することを目指します。

主な授業科目：遺伝資源・知的財産権論

総合人間科学コース

祝原　　豊

●健康づくりにつながるツール、子どもの体力と運動遊び

主に、中高齢者の健康の維持増進を目的とした様々な運動が、身体へ及ぼす影響について、運動生理学的側面からの検証を重ねています。また、子どもの走る・跳ぶ・投げる等の基本的動作を含む体力や運動遊び環境に関する課題についても、地域での活動を通して探求・発信しています。実践に関連した研究テーマとしては、各々のステージや目的に応じた、より効果的で安全な種目・方法の提示と、体力レベルに捉われないユニバーサルスポーツの検討が挙げられます。

主な授業科目：身体機能のメカニズムと計測、人体の構造と機能

江口　昌克

●システムズ・アプローチ、家族レジリエンス、社会的処方

様々な心理社会的課題（虐待、不登校、ひきこもり、非行・犯罪）などの理解と支援には、家族・学校・組織・地域との関係性（コミュニケーションの連続性や力動性）を考慮したシステムズ・アプローチが有効です。特に長期に渡る傷つきとそこから立ち直っていく過程を分析し、家族レジリエンスを促進するプログラムを検討しています。また、環境因子としての社会的処方のあり方についても提案します。

主な授業科目：コミュニティ心理学、健康・医療心理学

杉山　康司

●身体運動の解明、健康維持増進、トレーニング科学

ノルディックウォーキングの運動強度や効果に関して生理学的にアプローチしています。ポールが身体のどのような機能に影響を及ぼすのかを代謝および筋活動様相から検討しています。また、健康維持増進するために日常生活に密着したツールを考え、実験的に検証することにも取り組んでいます。我々が考案したブローライフルもその一つです。フィールド実験ではGPSシステムを利用したスポーツ活動中の研究を行っています。例えば、裾野市で推進している準高地トレーニングの効果は競技者に向け研究成果を配信しています。

主な授業科目：総合人間科学概論

須藤　　智

●モノ・サービスの使いやすさ（ユーザビリティ）、人間の認知、認知工学、認知科学

専門は、認知心理学、認知工学、認知科学です。研究室では、心理学の知見や方法を用いて『人間が使う道具（モノ・サービス）の使いやすさ（ユーザビリティ）のメカニズム』や『道具を用いて活動する際の人間の認知過程、認知機能に関する研究』を行っています。

近年は、高齢社会をテーマに、高齢者にとっての道具の使いやすさのメカニズムの研究、人間の記憶や注意、認知的加齢に関する認知心理学的研究、市民と協働でモノづくりを行う共創デザイン、リビング・ラボについての研究を行っています。

主な授業科目：現代社会の認知科学、デザイン心理学、知覚・認知心理学

堂囿　俊彦

●人間の尊厳、医療・福祉の倫理、倫理コンサルテーション

医療や福祉の領域において、患者・利用者や専門職は、しばしば困難な問題に直面します。こうした場合に、問題の解決を支援する上で有効と考えられてきたのが対話であり、実際「倫理コンサルテーション」といった仕組みが導入されてきました。しかし仕組みを作っただけでは不十分です。「今の仕組みをよりよいものにするにはどうすればよいのか」、「どのようにして話し合いを進めればよい結果につながるのか」といった問いを、医療・福祉における中心的な概念である「人間の尊厳」という視点から探求しています。

主な授業科目：応用倫理学概論

平嶋　裕輔

●サッカー、コーチング学

主にサッカーを題材にして研究を行っています。実際に自分がコーチング現場へ立ち、そこで感じた疑問や抽出した課題を、科学的な手法によって分析し、現場へフィードバックするということに取り組んでいます。

特に興味をもって取り組んでいるのが、試合や練習の映像から数量的なデータを抽出し、そのデータを統計的な手法によって分析する、「ゲームパフォーマンス分析」手法を用いた研究です。現在はテクノロジーの発展に伴い、スポーツからも膨大な量のデータが半自動で収集されています。そのため、それらのデータをいかに活用するかが重要な課題となります。

主な授業科目：コーチング学

正木　祐史

●犯罪行為者の社会復帰

刑事事件処理のプロセスの中に、犯罪行為者が社会内処遇を受けて社会復帰を目指すという段階があります。“更生保護”という領域がそこを担うのですが、近年、社会復帰をよりよく果たすためには、福祉領域を中心とした他分野との連携が重要であるとの認識が深まり、「司法と福祉の連携」が重要トピックとなっています。処遇に関する実務家や社会福祉の専門家などと協力しながら、よりよい社会復帰のための条件、必要な制度設計や、望ましい連携のあり方などの理論的制度的な探求を行っています。

主な授業科目：人間行動科学と刑事政策

満下　健太

●リスクの捉え方、リスクマネジメント、学校安全

心理学関連領域を中心として、主に「リスク認知」と「学校安全」に関する研究に取り組んでいます。「リスク認知」とは、様々な物事に潜在するリスクを主観的に評価・判断することであり、その特徴や認知構造を研究しています。「学校安全」では、身体的事故など学校が抱えるリスクにはどのようなものがあるか、どのような対策や教育との両立方法が考えられるかといった課題を扱っています。研究を通して、社会や学校からのリスクの完全除去を目指してはいません。むしろ、それらを的確に認知し対処しながら活動を維持できる個人・組織の形成に貢献できればと思っています。

主な授業科目：情報処理・データサイエンス演習、共創科学実験法（人間科学）

村田　真一

●スポーツ経営学、ハンドボール

私の専門は、スポーツ経営学です。スポーツ経営学とは、私たちがスポーツを実践したり、観戦したりする機会を支援するための「“組織”の“事業経営”」に関する学問です。私が主宰する研究室では、学校、地域スポーツクラブ、イベント興行団体、プロスポーツ団体、スポーツ行政などの様々な組織の事業経営について調査・研究を進めています。また、実技指導としてハンドボールの指導・ゲーム分析にも取り組んでいます。

主な授業科目：スポーツ経営学

吉川　真理

●間接正犯、責任能力、安楽死、性犯罪

私の専門は刑法です。私は、これまで、他人を道具のように使用して犯罪を実現する間接正犯の問題や、責任能力、安楽死、性犯罪の問題について研究を行ってきました。研究の手法としては、外国法、特にドイツの判例・学説における議論を参考にしながら、日本の判例・学説について分析を行い、最終的には、立法のあり方についても提言を行ってきました。

主な授業科目：人間科学の課題と法

入学者選抜の情報

選抜方法の概要は、静岡大学の学部入試ウェブサイトに掲載されている「入学者選抜に関する要項」や各選抜の募集要項に記載しています。
https://www.shizuoka.ac.jp/nyushi/

〇共通テストを課さない総合型選抜
募 集 人 数：全学科枠 20名、専門学科及び総合学科枠 ８名、社会人枠 若干名
出 願 期 間：令和６年９月２日～６日
選 抜 期 日：令和６年10月５日（予備日　10月19日）
選抜方法等：聴講論述試験（100点）、面接（100点）
出 願 資 格：高等学校における調査書の全体の学習成績の状況（評定平均値）が3.8以上の人
（全学科枠）　次の英語力試験のいずれかを満たしている人
・英検準２級以上合格　・TOEFL iBT Test 40点以上　・TOEIC L&R+2.5x（S&W）625点以上
＊専門学科・総合学科枠、社会人枠の詳細は募集要項を確認してください。

〇共通テストを課す学校推薦型選抜
募 集 人 数：20名（高等学校１校で推薦できる人数は定めません）
出 願 期 間：令和７年１月27日～31日
選 抜 期 日：令和７年２月８日
選抜方法等：大学入学共通テスト　５教科６科目、面接　*配点は８月末公開予定の募集要項を確認してください

〇一般選抜（前期日程）
募 集 人 数：47名
出 願 期 間：令和７年１月27日～２月５日
選 抜 期 日：令和７年２月25日
選抜方法等：大学入学共通テスト　７教科８科目または６教科８科目（配点合計950点）
個別学力検査　英語200点、国語または数学　200点、志望理由書　100点（配点合計 500点）

〇一般選抜（後期日程）
募 集 人 数：20名
出 願 期 間：令和７年１月27日～２月５日
選 抜 期 日：令和７年３月12日
選抜方法等：大学入学共通テスト　７教科８科目または６教科８科目（配点950点を600点に圧縮）
個別学力検査　英語200点、小論文　200点（配点合計400点）

入試データ

R５年度		募集人数	志願者	受験者	合格者
総合型	全学科枠	20	45	44	24
	専門学科及び総合学科枠	8	4	4	4
	社会人枠	若干名	0	0	0
学校推薦型		20	21	21	17
一般選抜（前期）		47	130	113	51
一般選抜（後期）		20	174	47	29

R６年度		募集人数	志願者	受験者	合格者
総合型	全学科枠	20	39	39	23
	専門学科及び総合学科枠	8	7	7	5
	社会人枠	若干名	1	1	0
学校推薦型		20	22	22	20
一般選抜（前期）		47	88	76	50
一般選抜（後期）		20	283	78	23

入学者男女比

性別	R５年度	R６年度
男	46%	45%
女	54%	55%

入学者出身地域

地域	R５年度	R６年度	地域	R５年度	R６年度
北海道	１％	８％	静岡	43%	35%
東北	４％	４％	近畿	10%	13%
関東	７％	７％	中国	３％	２％
北陸	６％	８％	四国	２％	２％
中部	17%	18%	九州	７％	３％

３つの方針（ポリシー）

グローバル共創科学部の３つの方針（ポリシー）は以下のウェブサイトに掲載しています
https://www.shizuoka.ac.jp/education/policy/policy_f/gkk_f/#a02
・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）
・教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）
・入学者受入の方針（アドミッション・ポリシー）